

「二十八の瞳」が巡った小豆島での産業学習  
—2024（令和6）年度「地理学特講」と「社会科教育実践演習  
- 地理 -」（大学院）の覚え書き，教育現場における  
フィールドワークをめぐる若干の考察を添えて—

香川貴志<sup>\*1</sup>

Twenty-Eight Eyes' Excursion for Industrial Learning on Shodoshima Island  
: Memorandum of a Geographical Field Trip in August 2024,  
and Some Consideration of Fieldwork in Education

KAGAWA Takashi

抄 録：最近の標記授業科目では珍しく少ない14名の参加者（学部：11名，大学院：3名）となった今夏の現地授業は，香川県小豆島（土庄町，小豆島町）において2泊3日の行程で実施した。小豆島は各種の食品工業と観光が基幹産業となっているため，これらを島の経済基盤と捉え，基幹産業が交通面での不利を強いられる島嶼部でいかに存続してきたのか，また存続しているのかを現地で見聞した。こうした産業学習は，とりわけ小学校社会科の地域学習で尊重される内容である。事前学習で文献精読と要旨執筆に励み，地形図の読図演習にも取り組んだ。これらは近年の当科目の手法を踏襲したものである。受講生は高等学校での地理未履修者が多い世代なので，地理的な見方・考え方を現地で体感的に学ぶことは，近い将来における教育実践を視程に収めたときに大きな価値があるだろう。

キーワード：フィールドワーク，食品工業，オリーブ，ごま油，醤油，素麺，島嶼観光

## I. 授業の狙いと設計

本授業科目は，偶数年度に開講しており，事前学習5コマ（10時間）と実地授業10コマ（20時間）から構成されている。現地授業は，実地での視察と現地討論からなるフィールドワーク（以下ではFWと略記）である。教育学など多くの学問分野では，授業参観や教育現場視察，そして企業・団体訪問などをFWと称する場合が多い。しかし，野外での調査研究を尊重する地理学では，室内での活動はインドアワークと称し，通常はFWとは呼ばない。現地のフィールドに立って観察や聞き取りに励み，そこから学ぶ活動こそが地理学におけるFWである。

事実，小学校や中学校の社会科，高等学校の地理歴史科（地理総合と地理探究）の教科書には，現地で撮影された写真が多用され，その説明を補完するための統計やグラフが多く掲載されている。そしてこれらの写真，統計やグラフなどは，決して便宜的に用いられているのではなく，各地の特徴を的確に示しつつ，その特徴を以て他地域との比較（類似点や相違点の把握）ができるよう厳選を重ねたものとなっている。

ところが，各校種の地理に関わる教科書は，地理の本質を理解しないままに一瞥するとストーリーの無い「事実の羅列」だと誤解されてしまうことがある。授業を担当する教員は，児童生徒がそう感じてしまわないよう「地理は私たちの生活空間の仕組の理解やその改善に不可欠な人間活動を学ぶためのもの」であることを伝えなければならない。

そこで，今年度は社会科や地理歴史科の教科書において基幹的な位置を占めている産業活動に注目した。昨年

<sup>\*1</sup> 京都教育大学教育学部

度に実施した姉妹科目「地理学研究」では、近年重視されている防災・減災教育に焦点を当てた授業を三陸被災地で実施（香川：2024a, 2024b, 2024c）したが、これは各校種の学習指導要領と照合すれば理科や家庭科とも重なる部分が多く、応用的で教科横断的な性格が強い。対して今回の「地理学特講」で扱う産業活動は、基礎的・基盤的な性格を強く帯びている。

ローカルスケールで他地域との関係を考えるという点では、とくに小学校第4学年や第5学年の産業学習、さらに中学校社会科地理的分野における「地域調査」、高等学校地理歴史科の「地理総合」や「地理探究」においてFWと関連する単元との関連性が強い。本授業は、このような領域の指導力強化を図ることを狙いとして計画・設計されている。

なお、過去に実施した本授業科目「地理学特講」と姉妹科目「地理学研究」等の実施地域と記録については香川（2024c）にまとめているので、本稿ではこれらを列挙することは避ける。

## Ⅱ. シラバスの設計, 受講登録, 事前学習会

本章では、シラバスの設計とその留意点, 受講登録の方法と受講生の内訳, 事前学習会の内容について整理する。

### 2.1 シラバスの設計と留意点

京都教育大学の慣例に従い、シラバスは授業実施の前年末（12月）から入力可能となる。ただ、システムメンテナンスのため、年末年始に入力できない期間が設けられるので、2023年秋季からシラバスの骨格を考え始めた。それを基にシステム入力が可能になってすぐに素案を入力して、それを推敲のうえ2024年1月上旬に確定した。

シラバスは、学生が受講の判断をしやすいようにするため、事前学習開催日と現地学習実施期間、そして現地集合と現地解散の日時を明記した。宿泊先や訪問予定先との交渉の前に詳細を明記するのは難しい作業だが、筆者は多少の足かせになっても予定のアウトラインを明記しておくのが授業担当者の責務だと考えている。そのため「やむなく訪問先などを変更する場合がある」という注意書きを添えて、日程や時程を可能な範囲でシラバスに盛り込んでいる。

### 2.2 受講登録の方法と受講生の内訳

本授業科目は、2回生以上を対象とした科目（余裕があれば1回生も受講可能）である。受講可能な学生たちは各年度の年度末に実施される「次年度の受講ガイダンス」に前後してシラバスを参照しつつ、新年度開始直後に設定された受講登録解禁日からオンラインで受講登録を行う。

今年度の受講登録者は、学部学生11名（音楽領域：4回生男子1名、社会領域：3回生女子9名、2回生男子1名）と大学院学生3名（公共・文化プログラム：M1生3名）であった。学部開設の「地理学特講」と大学院開設の「社会科教育実践演習-地理-」は別時間に設定される科目であるが、現地行動は共通授業なので、以下では両科目を合わせて学部開設の「地理学特講」（または「本授業科」）と記す。ここ数年では最も少ない受講登録者であり、3回生以上の学生に地理学ゼミからの受講登録者が1名もいないのは筆者の本学着任以来で初めての経験となった。本授業科目は地理学の真髄に触れることができる科目なので、このことは残念の極みである。

### 2.3 事前学習会とその内容

本節では5回（日程的には3日）にわたって実施した事前学習会とその内容についてまとめる。授業時間数は、第1回・第2回で2コマ、第3回・第4回でも2コマ、第5回が1コマである。学部は各回とも土曜日正午が開始時刻で、受講生には「昼食を済ませてから講義室に来ること」と伝えた。大学院は原則として所定の開講時間に実施したが、第3回以降は、大学院学生の都合により学部・大学院の合同授業とした。以下の本節では、学部の授業をもとにして記述する。

### 2.3.1 第1回・第2回事前学習会（2024年4月27日（土）、12:00～15:10）

授業の目標や概要についてシラバス記載内容よりも詳しく説明した。これは2024年3月8日（金）から3月10日（日）にかけて実施した現地での下見調査を踏まえたもので、訪問場所や現地での時程などを一層具体化させたものである。

また、本授業科目および姉妹科目「地理学研究」で定例化させている「訪問地に関わる文献を分担して精読する」という手法を今回も踏襲した。その際に必要な文献のピックアップは前年度末（2024年3月末日）までに筆者が済ませており、その作業結果に基づいて設定した担当文献グループを示して、各々の担当者を決めた。その詳細については香川（2025a）に整理している。

### 2.3.2 第3回・第4回事前学習会（2024年7月6日（土）、12:00～15:10）

例年であれば、この事前学習会で地形図読図問題に取り組み、その解答と解説を実施しているが、今回の現地訪問では壺井栄『二十四の瞳』とこの作品を生んだ風土の体験が重要な構成要素となるため、1954年に木下恵介監督・高峰秀子主演で制作された松竹映画『二十四の瞳』DVDの鑑賞会を催した。そして、その感想文および地形図読図問題のうち模擬問題2・同3への解答を宿題として、次項で触れる第5回事前学習会で提出してもらった。

今年度の地形図読図問題は、新旧地形図の比較から地域変化を読み取る読図問題に加え、最近の大学入学共通テストや教員採用試験で頻用される地形図を基盤とした派生問題を盛り込んだ小問3題で編成した。次頁以降に新旧地形図と模擬問題を示したが、模擬問題1は新旧比較による最近頻出する地形図読図問題、模擬問題2と同3は地形図の記載事項から派生させた問題である。とくに模擬問題2と同3は知識を確かめる要素が強いため、講義室で解答させるよりも、自室などで資料参照をさせた方が知識の増強に効果的であると考えて宿題とした。

### 2.3.3 第5回事前学習会（2024年7月28日（日）、12:00～13:30）

ここでは、現地授業の最終的な要領の説明、宿泊費や現地で要する諸費用の集金、7月17日（水）深夜に締め切った文献要旨・キーワードを筆者が推敲した『文献要旨集』の配布を行った。『文献要旨集』は受講生全員が全体に目を通してから取り組む宿題を課した。この宿題は、例年通り、現地授業初日の集合時に出席確認を兼ねて回収することを伝えた。

第5回事前学習会での事前集金は、現地での宿泊料、小豆島内での団体行動時の入場料や作業体験料、第2日目（8月21日）と第3日目（8月22日）に利用する小豆島オーリーブスの2日間用フリー乗車券などの費用である。

また、第5回事前学習会では、現地で使用するフィールドノートも配布した。現地では毎年のように抜き打ちで夕刻にフィールドノートを集めて評価材料にしている。記入項目や内容は総じて脆弱で、これが現地行動における評価点を下げる元凶となっている。フィールドノートの記載方法については、社会領域専攻に所属する学生は必修科目である「地理学概論」で詳しく触れているため、それが知識・技能として十分な定着をみていないのは残念である。なお、フィールドノートに氏名を書き忘れる者が散見されるため、配布の際に受講者名簿より転記しておいた。

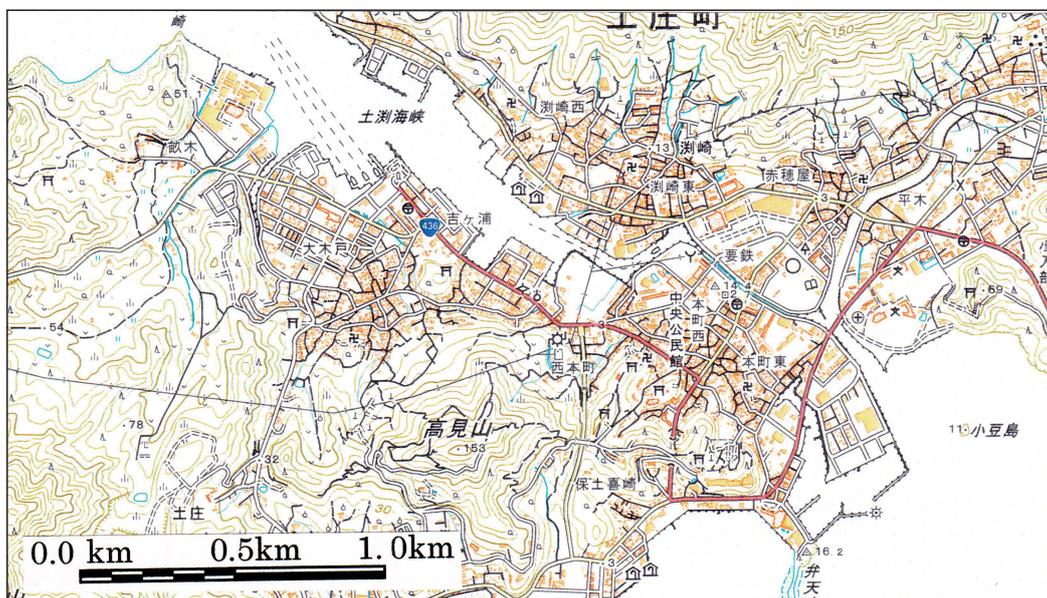
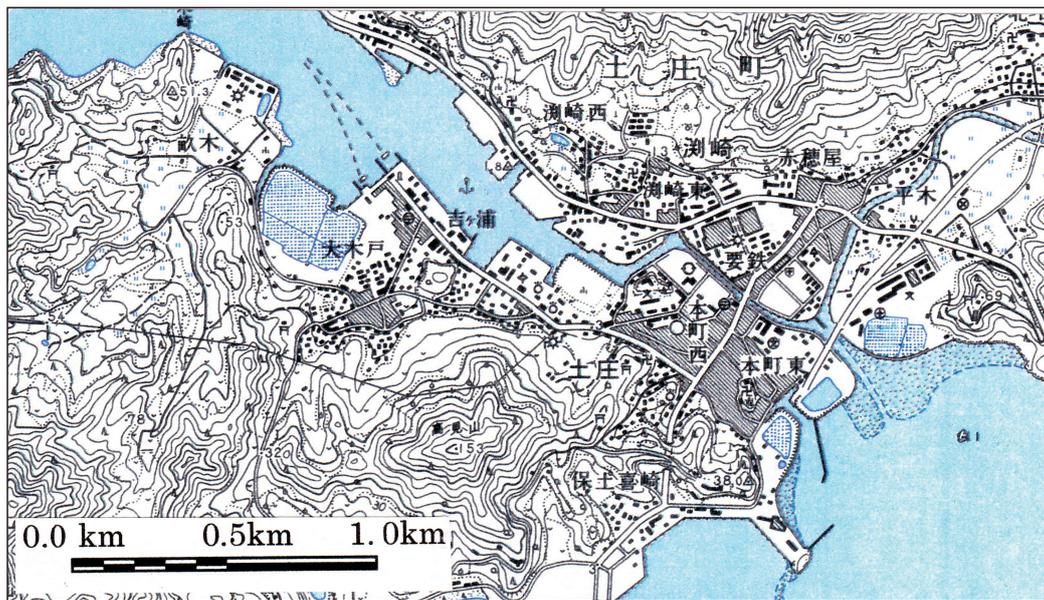


図1 土庄町の中心市街地付近の新旧地形図  
(1/25,000「土庄」, 旧図(上側): 1971年, 新図(下側): 2022年発行)

**模擬問題 1** 図 1 に示す 1/25,000 地形図「土庄」（旧図は 1971 年，新図は 2022 年発行）を比較して述べた文章のうち，説明の内容が適切でないものを次の①～④のうちから 1 つ選び，その判断理由（どこが説明として適切でないのか）を記しなさい。

- ① 大木戸地区のフェリー乗り場付近の塩田の跡地は，区画が整えられて市街化された。
- ② 平木地区南側の海岸にあった塩田の跡に学校が建設され 2 つの学校が隣接している。
- ③ 湊崎の赤穂屋地区の道路北側にあった学校と道路南側の工場はいずれも閉鎖された。
- ④ 土庄町役場は東北東へ約 400m 移設され，新庁舎の隣接地に図書館が立地している。

**模擬問題 2** 図 1 の旧図にみられる塩田の立地に有利な気候条件，または塩の生産についての説明文として最も適切なものを次の①～④のうちから 1 つ選べ。また，説明が「適切でない」と判断した 3 つの選択肢について，どの部分が判断の根拠になったのかを簡潔に述べよ。

- ① 天日乾燥で塩を得る塩田は，晴天の多い冬季において乾燥を促す風の強さが必要である。
- ② 天日乾燥による塩田の衰退要因として，化学製法による塩の生産を挙げることができる。
- ③ 海水の天日乾燥による製塩は，海岸が乾燥地域になりやすい大陸東岸に多くみられる。
- ④ 塩化ナトリウム鉱物を粉砕した岩塩は，海岸近くで産出され内陸部での採掘は稀である。

**模擬問題 3** 図 1 の新図においてフェリー乗り場の近くに記されている土湊海峡は，土庄町の土庄地区と同・湊崎地区を分ける海峡で，その幅が「世界一狭い海峡」としてギネスブックにも登録されている。国際的にみた場合，海峡は(1)「両岸が別の国家・地域」である場合と(2)「両岸が同一の国家・地域」となって土庄町のように同一組織が統括している場合とがある。次の①～④のうち上記(2)のようになっているものを 1 つ選べ。また，すべての選択肢について，その海峡の両側にある国を解答欄の様式に従って挙げよ。

- ① ジブラルタル海峡
- ② ベーリング海峡
- ③ ホルムズ海峡
- ④ ボスポラス海峡

### Ⅲ. 地形図読図（模擬問題 1）の解答状況

ここでは，第 3 回・第 4 回事前学習会の最後に実施した地形図読図（模擬問題 1）の解答状況から，読図における学生たちの弱点を探る（表 1，表 2）。なお，模擬問題 2 と同 3 の解説と解答は表 3 に示した。

#### 3.1 模擬問題 1 について

既に本稿において示した当設問は，土庄町の中心市街地を対象にしたものである。その出題形式は，新旧地形図をもとに市街地の変貌に関する選択肢の正誤判断である。素材には 1/25,000 地形図を用い，地図と設問を配布した際に「縮尺は 2 万 5 千分の 1 で原寸大です」と説明した。配布した新旧地形図には，本稿では添えているスケールバーを意図的に割愛した。

なお，解答の正誤は成績評価には直結しないこと，評価の対象は各選択肢についての補足説明であることを伝えた。解答のための時間は 20 分である。先述のとおり模擬問題 2 と同 3 は宿題にしたため，地形図読図の解答を終えた者は答案提出の後に退室できることにした。

#### 3.2 解答結果からみえてくるもの

今回の解答状況を見ると，今年度は地理学を専門とする受講生が全く含まれないことが影響したのか，あるいは敢えてスケールバーを添えずに口頭で縮尺を説明する方法をとったことが良くなかったのか，大多数の者が距離判断のミスで誤答に誘導されていた（表 2）。

表 1 土庄町中心部に関する地形図読図の模擬問題の解説例と解答

**【模擬問題 1 の総合的解説】**

近年の大学入学共通テストや教員採用試験における地形図読図問題は、地域変化の理解を確かめるための新旧地形図の比較で作成されることが多い。また、同時に地形図に描かれた内容に関する基礎的知識や応用的な能力が試されることも多くなった。そこで事前学習における演習的な課題として、地形図読図問題を 1 つ、塩田や塩の生産に関する問題を 1 つ、土庄町中心部にある「世界一幅の狭い海峡 (=土淵海峡)」から派生させての世界各地の海峡に関する地誌的な 1 つ、合計 3 題を作成してみた。教員採用試験に備えるためにも早期からこの種の出題形式に慣れておくことが大切である。

**模擬問題 1****【正誤判断に関わる解説】**

- ① フェリー乗り場に隣接していたフリーハンドで描いたような面的な記号は、1986 年に廃止されてしまった塩田の記号である。かつては揚浜式塩田や入浜式塩田、さらにその後の枝条架式など、天日乾燥を活用した塩田が相応の敷地を要したため、このような地図記号が存在した。現在の国内ではイオン交換膜法という化学的製法で塩を生産するようになり、ごく一部の伝統的生産地区や展示・体験用の塩田を除いて、塩田は消滅して地図記号が不要になった。塩田の跡地は、土壌の中に多くの塩分が残留するため農耕には適さない。そこで、面積が広く平坦な塩田の特色を活用して、住宅地や商業地、そして公共施設などが建設されることが多い。当地では区画整理された住宅地がみられるが、塩田に思いを馳せながら現地を歩くのも一興である。正しい記述なので、この選択肢は正解にできない。
- ② ここのも上述の①と同様に広く平坦な塩田跡地の典型的な土地活用がなされている。学校（小中学校）の地図記号が並置されているので、小学校と中学校が隣接していることが想像できる。現地を歩いて確認すると、後から設置された学校は、別の場所から移転してきた土庄小学校であることを知れる。正しい記述であり、この選択肢を正解に選ぶことはできない。
- ③ 旧図をみると、赤穂屋地区のほぼ東西方向に走る道路の北側には学校、それと道路を挟んで相対する場所には工場の地図記号が描かれている。学校の地図記号は現存するので、この学校が何らかの理由で閉鎖されたことは自明であり、選択肢の学校に関する説明は正しい。他方、工場の地図記号は 2013 年に廃止されているので、それ以降に発行された新図では建物の形状から工場である可能性を類推する想像力が求められる。工場の建物が別用途に転用されている可能性もゼロではないが、当地は大都市ではないため商業施設などへの転用は考えにくい。ここは工場が存続していて選択肢の説明文の一部が誤っていると類推して④の選択肢を精査するのが賢明な解答法である。1980 年代以降に廃止された地図記号には、電報・電話局、塩田、工場、桑畑、樹木に囲まれた居住地、採石場があり、他方で新設された地図記号には、電子基準点、図書館、博物館、風車、老人ホーム、自然災害伝承碑がある。
- ④ 役場の地図記号の移動方向、そして縮尺示すスケールバーの両者から判断して、役場移転に関する記述は正しいことがわかる。また、新しい役場の隣接地には本を開いた形状でデザインされた図書館の地図記号が描かれている。旧図で同じ地点を観察すると建物がみられるので、これが地図記号の無い時代の図書館であった可能性はある。しかし、選択肢には「隣接地に新設された」ではなく「隣接地に立地している」と記されているため、旧図における図書館の存否には無関係である。したがって、この選択肢の記述は正しく、正解としては選べない。このように判断すれば、正解を③にすることができる。

**【正解】③**

ただ、今回の解答状況からは、多くの受講生が 1/25,000 地形図の縮尺自体を理解できていない、すなわち「例示された地形図が原寸大なら実距離の 1km は図上で 4cm になる」という基本を理解できていないことがわかる。模擬問題 1 の解答時間中は質問も受け付けていたが、縮尺についての照会はなかった。多くの受講生が「知っておくべきことを改めて質問するのは恥ずかしい」と感じたのではないかとの懸念が残る。図中の等高線間隔や文字・地図記号の大きさから判断すれば、設問で使われている地図が 1/25,000 地形図の原寸大であることは容易に判断できるはずなので、こうした機転や判断ができる準備をしておくよう改めて説明しておいた。

表 2 現地授業に先駆けて実施した事前学習会での受講生による選択肢別の選択率

	①	②	③	④
模擬問題 1 (土 庄)	0(0.0%)	1(8.3%)	3(25.0%)	8(66.7%)

資料:受講生12名(2名欠席)の地形図読図模擬問題1・模擬問題2への解答

注)表中の網掛け部分が正解となる選択肢である。

注)第3・4回事前学習会に欠席した受講生2名の解答は除外した。

表 3 土庄町中心部に関する地形図読図の模擬問題から派生させた設問の解説例と解答

### 【模擬問題2の総合的解説】

近年の大学入学共通テストや教員採用試験では、地形図読図問題から派生させて関連事項についての理解を確認するような出題スタイルが多くみられる。そこで模擬問題2では、製塩に関わる産業史的あるいは自然地理学的観点からの問い掛けを試みた。

#### 模擬問題2

### 【正誤判断に関わる解説】

- ① 海水から天日乾燥により製塩を行うには、年間を通して乾燥していることが望ましいが、とくに日差しが強い夏季に乾燥することが望ましい。そのため、年間を通じて降雨量が少ない瀬戸内海沿岸で製塩業が発達した。瀬戸内式気候の特徴は、各種試験で出題頻度が高いので、参考書等で復習しておくことが望ましい。この選択肢では「冬季」という箇所が誤った説明となっているため正解にはできない。
- ② 化学製法はイオン交換膜法というもので、この手法は工場製塩である。したがって、天日乾燥のための塩田のように広く平坦な土地は不要で、化学製法の普及はすなわち塩田の衰退を促すことになった。正しい記述なので、この選択肢を正解の候補として担保のうえ、残り2つの選択肢から誤りを探せば正解を導出できる。
- ③ 大陸東岸は北半球・南半球の別を問わず、季節風の影響が大きく、乾燥した気候にはなりにくい。他方、大陸西岸は沖合の海流や風の影響を受けて大陸東岸よりも乾燥しやすく、砂漠気候になる地域も多い。メキシコのカリフォルニア半島中部にあるゲレロネグロは年間降水量が100mm未満の砂漠気候であり、ほぼ東京23区の面積に匹敵する約500km<sup>2</sup>の世界最大の塩田がある。この選択肢では、上述のように「大陸東岸」が誤りなので、これを正解にすることはできない。
- ④ スーパーの売場でヒマラヤ・ピンクソルトという商品を見かけた経験のある人もいると思うが、岩塩の多くは内陸部で採掘される。内陸国であるオーストリアのザルツブルクの「ザルツSalz」は、オーストリアの公用語のドイツ語で「塩」を意味する。ここの郊外には塩坑があり、塩の採掘で得られた富がザルツブルク繁栄の基盤となった。ここに岩塩が無ければモーツァルトも生まれていないかもしれない。この選択肢は「海岸近く」の箇所が誤っているので、担保している②を正解とするのが穏当である。

【正解】②

#### 模擬問題3

### 【正誤判断に関わる解説】

設問自体は知識を問うような単純な様式であるが、海峡は今日の国際情勢を考えるうえで重要性が高い。そのため、中学校社会科の地理的分野と公民的分野との融合、高等学校の地理歴史科内での地歴融合、さらに地理歴史科と公民科との教科横断的な知識として極めて重要である。以下では各選択肢に挙げた海峡の両側にある国家をそれぞれについてまとめて解説・解答に代える。

- ① ジブラルタル海峡(北:英領ジブラルタル,南:モロッコ)→正解にはならない。
- ② ベーリング海峡(東:アメリカ合衆国,西:ロシア)→正解にはならない。
- ③ ホルムズ海峡(北:イラン,南:オマーン)→正解にはならない。
- ④ ボスポラス海峡(東:トルコ,西:トルコ)→この選択肢が正解となる。

【正解】④

## IV. 現地授業について

本章では現地授業の行程・時程と現地での学習内容を整理する。訪問先については、土庄町と小豆島町が協力して編集している『わたしたちの郷土 小豆島』（2019年版）で扱われている産業の大部分を取り上げた。なお、香川県では香川大学教育学部社会科研究会が編集した『わたしたちの香川県』（初版は1968年）が副読本として多くの小学校で併用されているが、同書は小豆島をほとんど扱っていない。以下の各節に付記した最高気温は気象庁データをもとにした、小豆島で1か所のみ存在する小豆島町内海地区のものである。

### 4.1 第1日目（8月20日（火）、晴れ、内海の最高気温：32.0℃ [14:00]）

第1日目は、集合時間と場所を13:30に土庄港前の平和の群像前とした。ただし、集合してから直ぐに行動へ移れるよう「集合時には昼食を済ませていること」との条件を付けた。

#### 4.1.1 集合からかどや精油への移動（13:30～14:00）

集合時には『文献要旨集』を使って各受講生が行う宿題を集めて出席確認を兼ねた。続けて平和の群像前の宿舎に荷物を預け、かどや精油まで徒歩で約10分の移動をしたこの移動行程の経路は整然と区画され歩道が整った街路が展開する。これこそが塩田跡地である。

#### 4.1.2 かどや精油「今昔館」（14:00～14:50）

ところでかどや精油は、国内外で販売されているごま油の製造元である。その工場の一画に「今昔館」という施設があり、ここで小豆島のごま油製造の歴史や文化について説明を受け、展示物の見学と質疑応答の時間をとった。瓶に入ったごま油は決して価格の割に軽いものではないが、陸上交通が現代ほど発達していない時代には、航路による輸送が逆に有利であったことも質疑の中で判明した。

#### 4.1.3 銀四郎麺業（15:00～15:50）

かどや精油を出た一行は、土庄港へ戻る途中の徒歩約5分の位置にある銀四郎麺業に立ち寄り、素麺製造の「箸分け」を体験した。この作業は素麺製造の中でも品質を大きく左右する重要な工程である。本来は気温が低い季節に行われる作業であるものの、銀四郎麺業では工程上の模索と工夫により通年作業を可能にした。箸分け体験は料金が1,100円（土産付き）であり、金額的にはリーズナブルに貴重な体験ができる。

#### 4.1.4 土淵海峡（16:30～16:40）

銀四郎麺業から一旦宿舎へ戻り、すぐに一行は市街地中心部へ向かって歩き始めた。市街地を徒歩で15分ほど進むと、土庄地区と湊崎地区を分ける土淵海峡という水路に到達する。実はこの水路がギネスブックに登録された「世界で最も幅の狭い海峡」である。ギネスブックへの登録申請に向けて地元では実施された様々な努力は、事前学習における文献研究で学習済みである。

#### 4.1.5 迷路のまち（16:45～）

土淵海峡の見学後、一行は土庄本町のバス停へ移動した。この地区の訪問に際しては、第5回事前学習会でFW用の地理院地図を大縮尺で印刷したものを配布済みである。出発地点に定めたのが土庄本町バス停留所であり、そこは地図上でも目立つようにマーカーを付しておいた。「迷路のまち」での課題は、各自でこの地区を巡り、その移動経路を配布した地図上に記して提出するというものである。こうした基礎的な作業をこなせるようにしておくことが教職に就く者には不可欠である。受講生に感想を聞くと総じて楽しい時間を過ごしたようだ。

この日のフィールドにおける全体行動は、「迷路のまち」で散らばるまでで、一時解散前に宿舎には各自やグループで戻り、夕食は各自で摂ること、夜のミーティングで「迷路のまち」での課題を提出することなど、要点についてのガイダンスをした。

#### 4.1.6 第1日目ミーティング（20:00～20:30）

この日のミーティングでは、第1日目にフィールドで学んだことの振り返り、第2日目の行程の最終確認を行った。受講生各自の夕食や入浴の時間に配慮し、開催時間は20時とした。

### 4.2 第2日目（8月22日（水）、晴れ、内海の最高気温：34.8℃ [12:20]）

第2日目は、前日の集合時間前に筆者がまとめて購入しておいた小豆島オーリーブバスの「2日間フリー乗車券」(1,500円/人)で移動し、以下に列举する訪問先を巡った。今回の受講生数を踏まえると、フリー乗車券は借上げバスよりも格段に廉価である。

#### 4.2.1 エンジェルロード(半トンボロ地形)(9:30～10:10)

平和の群像前停留所を9:36に発つバス(西浦線東回り)でエンジェルロード最寄りの国際ホテル前停留所には9:48に到着した。当地は干潮時に砂州で繋がる半トンボロ(陸繋島)地形が観察できる。SHODOSHIMA TRAVEL GUIDE(2024)によれば、8月21日の干潮時間のうちの 하나가 3:30～9:30なので、当地訪問時には浅海部を通じて水没してから間もないトンボロの形状が何とかできた。受講生の大多数は、下に記すマルキン醤油記念館を見学後に当地を再訪した。

#### 4.2.2 道の駅小豆島オーリーブ公園(10:45～12:45)

国際ホテル前停留所を10:20に出発するバス(田ノ浦映画村線の臨時便)で10:41にオーリーブヶ丘に到着した。当地は、かつて小豆島のオーリーブ栽培をリードする研究所農園があった場所で、現在も多くのオーリーブ樹が植栽されている。また、飲食店や土産物店を含む多くの施設が併設され、小豆島観光の中心の一つを形成している。2024年3月に実施した下見調査の際に数か所のオーリーブ園を巡った結果、当地が小豆島のオーリーブ栽培を学ぶには最適であると判断した。

#### 4.2.3 醤の郷(ひしおのさと)(13:15～13:50)

オーリーブヶ丘停留所12:52発のバス(田ノ浦映画村線)で馬木停留所に13:06に到着した一行は、当地区一帯に展開している醤油製造の醸造蔵や佃煮工場が多くある「醤の郷(ひしおのさと)」からの香り楽しみながら、自然地理学的な観点に立って山麓湧水帯の説明も施しながらマルキン醤油記念館を目指した。若干の経路誤認があり「醤の郷」の中心部分をゆっくり巡れなかったが、当地区の市街地に家屋が想像以上に多いことを体感できた。これは職住近接の労働力供給において大きな意味を持っている。

小豆島で醤油醸造業や佃煮製造が発達した背景には、良質な塩を多く産出した産業基盤に加えて、陸上交通が未発達な頃の海上輸送が現代における高速道路の役割を果たしたと考えられる。つまり、小豆島は現代における高速道路インターチェンジ付近の流通機能の集積地区に相当したのである。その優位性は、公益財団法人全日本トラック協会(2024)やジャンボフェリー(2024)を参照すれば、現在においても輸送コスト面で相対的優位性が保たれていると推察できる。

#### 4.2.4 マルキン醤油記念館および自由行動(13:55～)

マルキン醤油記念館は「醤の郷」南端部に近い場所にある。ここは醸造蔵の見学だけでなく、醸造工程や醸造文化を学べるシステムが整っており、今回の授業における醤油醸造学習の拠点として訪問を決めた。記念館は空調が効いているため、暑さが厳しい夏季の行動ではクールダウンの効果も得られる。入場券を購入後、当日夜の反省会とコンパを兼ねたミーティング(19:20開始)の案内をして、入館後は自由行動として、エンジェルロードを再訪できるよう配慮した。

#### 4.2.5 第2日目ミーティング兼「打ち上げコンパ」(19:20～20:45)

今年度の受講生は、既述のとおり社会領域2回生男子が1名いたため、20歳に達しているかを確認してから後半にアルコールも伴うミーティング兼「打ち上げコンパ」に臨んだ。ミーティングの会場は、宿舍の配慮により12畳の和室を提供していただいた。ミーティング時の食品類は、事前集金していた中から支出し、筆者と大学院生がマルキン記念館からの帰途にオーリーブタウン内のスーパーマーケットで調達した。ノンアルコール飲料も含む飲料の多くと一部食品については、事前に宿舍近くのコンビニエンスストアで取り置きを依頼しておいた。

ミーティングでは、2日間の見聞を記録しているはずのフィールドノートを回収した。フィールドノートは成績評価の材料とするため、翌朝まで預かって評価した。昨夏の「地理学研究」も受講していた1名の受講生はフィールドノートの回収を予見していたと推察できるが、他の受講生は『京都教育大学環境教育研究年報』に掲載された過年度実施分の論文を熟読していない限り「抜き打ち」に近い提出物であったと思われる。大半の者の記入は不十分であった。

翌日の出発時刻を含む行程も告げた後の打ち上げコンパでは、2日間の振り返りとともに小豆島での貴重な経験が語られ楽しいひと時を過ごすことができた。

#### 4.3 第3日目（8月22日（木）、晴れ、内海の最高気温：34.8℃ [15:00]）

最終日である第3日は、寒霞渓と二十四の瞳映画村の2か所を訪問地に定めた。事前学習会で確認した帰路の行動パターンは、大学院学生3名が土庄へ戻って高松へ向かい、学部学生全員は坂手港から神戸港へ向かうジャンボフェリーで小豆島を離れることがわかった。

##### 4.3.1 経費節約のための苦肉の策

観光シーズンでもあり、この日に活用する路線バスに大きな荷物を持ち込むことは憚られた。そこで寒霞渓を訪問した後に路線バスの乗り換え地点である草壁港停留所で筆者から大学院学生3名に以後の学部学生の引率を移譲し、筆者は草壁港から路線バスで土庄の宿舎へ戻った。これは宿舎に保管を依頼していたジャンボフェリーでの帰路グループのキャリーバッグやスポーツバッグ類をタクシーで坂手港まで運ぶためである。運転免許を返納した筆者はレンタカーを運転できない。土庄へ戻る3名の受講生の荷物は宿舎で夕刻まで預かってもらい、各自が土庄港から小豆島を発つ前に受け取ってもらうようにした。

##### 4.3.2 寒霞渓

第3日目は、寒霞渓を訪問するためバスの便に制約があり、7時過ぎにチェックアウトを済ませ、平和の群像前を7:36に出発するバス（坂手線）に乗り7:53に池田港ターミナル前へ到着、同停留所8:20のバス（寒霞渓急行線）に乗り、ロープウェイの乗り場がある紅雲亭停留所には8:50に着いた。ここから寒霞渓山頂までロープウェイで往復して雄大な風景を楽しんだ。寒霞渓の観光シーズンは紅葉が著名な秋季であるが、夏季でも花崗岩が織りなす自然の造形美を観察すれば、小豆島の主要産業の一つが石材の切り出しであることが理解できる。一行は紅雲亭停留所を10:50に発って11:02草壁港停留所に到着した。草壁港から小豆島町役場前停留所や安田停留所付近は小豆島町の中心市街地で飲食店もあるため、ここで昼食を摂るよう指示してから、筆者は上述した荷物運搬のため大学院学生に以後の引率を移譲して土庄の宿舎へ戻った。

##### 4.3.3 二十四の瞳映画村

大学院学生に導かれた一行は小豆島町役場前停留所を13:00のバス（田ノ浦映画村線）で発って映画村には13:21に到着した。昼食は既に済ませているため、映画村の見学には1時間余を充当できた。当施設は決して広大ではない施設であるが、丁寧な見学や土産の購入などをしてしていると感覚的には1時間余の見学が穏当であると判断した。坂手港や土庄港へ向かうバスは映画村停留所を14:25に発ち14:40に坂手東停留所に着くため、15:15発の神戸行きフェリーには難なく乗船できることを3月に実施した予備調査で確認済みである。

## V. 現地で学べたことの概要と成績評価について

### 5.1 現地で学べたことの概要

今年度の現地授業では、本稿の冒頭にも記したように、各種の食品工業と観光が小豆島の経済基盤を支える基幹産業となっていることに着目した。そして、こうした基幹産が交通面での不利を強いられる島嶼部でいかに存続してきたのか、また存続しているのかを見聞した。その結果、2つの大きな事実を理解することができた。

その一つは、一見すると立地条件が悪そうに感じられる食品工業が持つ立地上の優位性である。小豆島の食品産業を代表するごま油製造業、素麺製造業、醤油醸造業は、主原料である胡麻、小麦、大豆が小豆島では多く収穫できない、すなわち島外から移入しなければならないという不利な条件の下で営まれている。他方、製造後の商品はいずれも重量の割に価格が高価ではないという共通性がある。これらは、食品工業にとって決して立地上の有利さを担保するものではない。

しかし、コンテナ貨物列車や高速道路が現代よりも格段に不便であった時代、海運は輸送費が安価で時間的に

も有利な輸送手段だった。それは、原料搬入と商品搬出の両面で立地上の優位性を維持した。その後、陸上交通網が整備されてからも、海運は重量の割には高額でない商品の輸送では優位性を保っている（公益社団法人全日本トラック協会：2024, ジャンボフェリー：2024）。こんにち多くの高速道路のインターチェンジ周辺地域が生産や流通の拠点となっているが、いわば小豆島は島全体が高速道路のインターチェンジのように機能しているとも解釈できる。

二つ目は、観光業におけるコンテンツ創出（土淵海峡、迷路のまち、オリーブ産業の観光化・商品化、瀬戸内国際芸術祭、二十四の瞳映画村など）と公共交通による利便性提供である。コンテンツについては多くを実地で見聞できたし、公共交通フリー乗車券を存分に活用して「上限300円」の小豆島オリーブバスを実体験した。そして、このバスが島内の人々の創意と努力で現在に至っていることは事前学習の文献精読で学ぶこともできた。今回の現地授業は、こうして事前学習との有機的なリンクageを実現し、近年では指折りの充実した内容となった。

## 5.2 成績評価

事前学習会、現地授業ともに例年以上に課題が多彩であったため、成績評価に際して多くの資料を得ることができた。そこで、ここ数年の姉妹科目の「地理学研究」を含めた授業で定例化させている「対象地域（またはその一部を指定しての）俳句や川柳」は実施しないことにした。成績評価の対象は、①論文要旨とキーワード抽出の出来栄え、②地形図読図の解答における各選択肢についての補足説明（解答自体の正誤は問わない）、③映画『二十四の瞳』の感想文、④模擬問題2と同3の正誤（慎重に地図帳を参照すれば簡単に正解を導ける）、⑤『文献要旨集』を活用した課題の出来栄え、⑥酷暑下を歩くのに相応しい服装の選択（事前学習会で何度か指示済）、⑦「迷路のまち」のFWを記した経路図の出来栄え、⑧フィールドノートの活用（記入内容）の状況、⑨現地授業での積極的な取組状況の程度、以上の9点である。

受講生に限られる（学部：11名、大学院：3名）のため、厳密にGPAに対応した評価区分を施すことは困難であるが、公正な評価に努めた。独自の評価基準のある大学院はさておき、学部については秀：3名、優：5名、良：3名、可と不可：各0名となった。

## VI. 教育現場におけるフィールドワークをめぐる若干の考察—むすびに代えて—

COVID-19が2020年から地球規模で猛威をふるい、高等学校では「地理総合」が2022年度より必履修化された。この間、ときには外出の自粛が要請され、教育現場ではオンライン授業の普及が進んだ。しかし、2022年5月に当該感染症が第5類への移行以来、旧来の授業形態がFWを含めて可能となった。そこで本稿を締めるにあたり、2022年以降に世に問われた地理学分野にける教育現場でのFWをめぐる議論を整理しておきたい。そこには、FWを含む今後の授業がコンピテンシー重視へとシフトすべきとの知恵が多く含まれているからである。

まず本稿と関係が深い大学等の高等教育機関でのFWに関しては、愛媛大学でのコロナ前からウィズコロナ期に至るまでの授業の変遷が兼子（2022）によって記されている。同様の工夫や苦労の変遷は、香川（2022, 2023, 2024c）による京都教育大学での事例からも読み取れる。いずれもコロナ禍においては比較的近い場所での実施、シングルルーム利用を強いられた等の記述が確認できる。また、日帰りを主体とした授業実践の試みでは、和歌山大学における実践例（齋藤ほか4名：2022, 野口ほか4名：2023, 荒木ほか10名：2024）が参考になる。コロナ禍がFWを見詰め直す契機となったとの宮本（2022）の論考も一読に値する。

ごく近年における初等・中等教育でのFWについては、カリキュラムの自由度が高いためか圧倒的に私立学校を主な対象とした実践例や研究が多い。たとえば、池（2022a）は探究型FWの徹底でコンピテンシーを強化できると主張し、同様の観点に立った多くの実践例を池（2022b）で紹介している。池ほか3名（2024）でも探究的なFWの実践が提案されている。さらに飯塚（2024）は、同じく私立学校を対象とした教科横断的なFWの模

素を膨大なデータを基に試みており、他教科（科目）との科目横断では理科（生物、地学）や美術が有効であろうと述べている。身近な事物から発展させる吉崎（2022）の試みもFWの裾野拡大を考えると興味深い。

公立学校も視程に収めたFW論としては、今井（2023）による生徒の自主性を尊重したウォークラリー巡検の提案、今や日本の地理教育の最先端・最高峰となった地理オリンピックにおける第3次選抜試験の狙いと実際を詳述した井上（2024）の論考、地理や地理学の裾野拡大とボトムアップ拡大を並行して実現するために、小中高一貫カリキュラムの創成とそこでのFWが大切であると説いた中村ほか4名（2024）の主張、計3コマの時間的制約を設けてFW効果の最大化と汎用性を追求した七里（2024）の試みなどは、いずれも地理（地理学）の体幹を強靱化する素材として大変参考になる。

教員養成の現場に身を置いていると、「地理総合」が必履修化されて一方、有益な地理教育を施せる地理学プロパーの教員が絶対的に不足している現状を痛感する。必履修化は確かに喜ばしいことには違いないが、「必履修科目だから渋々開講しないといけない」との考えの下で「地理総合」の授業が実施されると、教師のカンニングペーパーに近似した指導書の内容を深く理解しないまま表面的に転用するだけの授業が増えてしまう。そして、このことが間違いなく「地理嫌い」の生徒たちを増殖させてしまうことになる。それは地理学界や地理教育界にとって決して望ましくない「負のスパイラル」に他ならない。そう考えると、「地理総合」だけでなく「地理探究」でも採用できる横山ほか5名編著（2023）は、現代的話題や喫緊の課題が詰まっているエピソード集であることから「地理好き」を増やしていく糸口になるかもしれない。

京都教育大学での筆者の定年退職が2026年3月末に迫り、本授業科目は今回が筆者の担当する最後の年度となった。そして、姉妹科目「地理学研究」は2025年度が筆者の担当する最終実施年度となる。教科内容（地理学）の後任教員として着任する方には、事前学習における丁寧な文献研究に励んできた本学のFWの手法を絶やすことがないよう期待したい。

## 謝辞

今回の現地授業の実施に際し、土庄町立土庄小学校校長の役重和雅氏、小豆島町教育委員会こども教育課教育指導室主任指導主事の港 貴康氏および同・松本共平氏、小豆島手延素麺協同組合理事長の伊藤雄二氏、銀四郎麺業株式会社総務部長の田中秀典氏には多大なご支援・お力添えをいただきました（職名は松本氏が2024年6月7日現在で、他の4氏は2024年3月8日現在）。また、本授業科目の実施に際して多くを参考にした小学校社会科副読本『わたしたちの郷土 小豆島』2019年版の入手には上述の役重氏、同書旧版の閲覧に関しては小豆島町立図書館のみなさま、『わたしたちの香川県』の入手に際しては、現行版と旧版の一部を青葉教育社（丸亀市）代表取締役の西原ひとみ氏と同社の西原真弓氏、同書旧版の閲覧では土庄町立図書館のみなさまに便宜を図っていただきました。さらに、事前学習の際の文献収集においては、山陽学園大学非常勤講師の今井英文氏にご助力いただきました。以上の方々に対し、末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。なお、本研究のアウトラインについては、2024年8月25日に名古屋学院大学で開催された2024年度日本地理教育学会大会において発表しました。

## 引用・参考文献（小豆島に関する文献は香川（2025a, 2025b）の付録を参照）

- 荒木翔吾・岩谷真紘・奥澤佑成・垣本真子・山東 華・下垣琴海・中川颯太・中田周仁・吉田晋平・山神達也・島津俊之（2024）. 海南市を対象としたフィールドワークの実践—2023年度「地理学地域調査実習」の報告—. 『学芸』, **70**, pp. 55-62.
- 飯塚和幸（2024）. 社会科（地理）を中心とした教科横断型の探究学習におけるフィールドワークの課題と開発. 『日本私学教育研究所紀要』, **60**, pp. 39-42.
- 池 俊介（2022a）. 地理教育における探求型フィールドワーク普及のための取組み—「私たちは提案する！」プロジェクトを事例に—. 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』, **32**, pp. 1-12.
- 池 俊介（2022b）. 『地理教育フィールドワーク実践論』. 学文社.
- 池 俊介・齋藤亮次・山本隆太・吉田裕幸（2024）. 地理教育におけるフィールドワーク授業のあり方に関する試

- 論.『早稲田教育評論』,38(1), pp. 37-64.
- 今井英文 (2023).『ウォークラリー巡検—生徒主体の巡検学習—』.古今書院.
- 井上明日香 (2024).フィールドワークで培うスキル—地理オリンピック第3次選抜試験を事例として—.『地理』,72(1), pp. 50-53.
- ジャンボフェリー (2024).神戸—小豆島航路車両航送料金.  
<https://ferry.co.jp/home/kobe-shodoshima> (2024年6月7日閲覧).
- 香川大学教育学部社会科研究会 (2024).『わたしたちの香川県』.青葉教育社.
- 香川貴志 (2022).COVID-19拡大抑止に熟慮したフィールドトリップの実践—出雲大社, 石見銀山, 萩と津和野を巡る2021(令和3)年度「地理学研究」の覚え書き.『京都教育大学環境教育研究年報』,30,pp.87-102.
- 香川貴志 (2023).京都府北部地域の再発見—「海の京都」を巡る2022(令和4)年度「地理学特講」の覚え書き—.『京都教育大学環境教育研究年報』,31, pp. 71-85.
- 香川貴志 (2024a).津波被害からの復興を学ぶための事前学習(第1報)—三陸ジオパーク, 石巻市大川小学校跡, 南三陸町—.『京都教育大学環境教育研究年報』, 32, pp. 33-45.
- 香川貴志 (2024b).津波被害からの復興を学ぶための事前学習(第2報)—陸前高田市, 釜石市, 大槌町, 山田町, 宮古市田老—.『京都教育大学環境教育研究年報』, 32, pp. 47-58.
- 香川貴志 (2024c).三陸被災地で復興のあとさきを考える—2023(令和5)年度「地理学研究」の覚え書き—.『京都教育大学環境教育研究年報』, 32, pp. 59-72.
- 兼子 純 (2022).コロナ禍における地理学フィールドワーク実施体制の確立—愛媛大学法文学部地理学教室の事例.『地理学報告』,124, pp. 205-213.
- 公益社団法人全日本トラック協会 (2024).  
[https://jta.or.jp/wp-content/themes/jta\\_theme/pdf/hyoujun\\_unchin202403/shikoku\\_pdf](https://jta.or.jp/wp-content/themes/jta_theme/pdf/hyoujun_unchin202403/shikoku_pdf) (2024年6月7日閲覧).
- 宮本真二 (2022).地理「学」のフィールドワーク論—ここ2年もつづいたコロナ禍で考えたこと—.『地理』,67(5), pp. 13-26.
- 中村洋介・大矢幸久・樺実土里・林 靖子・阪上弘彬 (2024).近未来社会の子どもを育てる小中高一貫地理教育カリキュラム(第10回)—フィールドワーク学習の小中高一貫地理教育を目指して—.『地理』,69(1), pp. 110-115.
- 野口凌我・松本晋吾・森田倅生・渡辺菜央・山神達也 (2023).みなべ町を対象としたフィールドワークの実践—2022年度「地理学地域調査実習」の報告.『学芸』,69, pp. 7-11.
- 齋藤大吾・坂田良介・西村龍太郎・簗澤孝介・山神達也 (2022).湯浅町を対象としたフィールドワークの実践—2021年度「地理学地域調査実習」の報告.『学芸』,68, pp. 41-45.
- 七里広志 (2024).巡検を組み込んだ中学校社会科「地域調査の手法の汎用的単元モデル.『人文地理』,76(2),pp.91-110.
- SHODOSHIMA TRAVEL GUIDE (2024).エンジェルロード干潮時間(7~9月).  
[https://shodoshima.com/tourism/angelroad/#index\\_id4](https://shodoshima.com/tourism/angelroad/#index_id4) (2024年8月12日閲覧)
- 小豆郡小学校長会 (2019).『わたしたちの郷土 小豆島』.小豆郡教育会.
- 横山 智・湖中真哉・由井義通・綾部真雄・森本 泉・三尾裕子編著 (2023).『フィールドから地球を学ぶ—地理授業のための60のエピソード—』.古今書院.
- 吉崎亜由美 (2022).中学校・高等学校におけるフィールドワークの学びのデザインと生徒の変容.『地理』,67(5), pp. 2-3, pp. 27-35.

